

「上流は下流を思い、下流は上流に感謝する」 上下流交流・連携の一層発展を

私たちが毎日飲んだり、使ったりしている水は木曾川水系（木曾川、飛騨川、愛知用水など）の恵みです。長野県や岐阜県の山々の森から清流が生まれ、「おいしい水」となって私たちの暮らしを潤います。この木曾川の水の恩恵を長野県、岐阜県、愛知県、三重県の約775万人が受けています。

“森は水の源、水は命の源、川は命のつながり”です。上流の山間地に住み、暮らしている人びとが、山や森を守り、「水」を支えています。775万人の約30%にあたる225万人の名古屋市、その名古屋市の水道を特徴づけるのは「おいしい水」です。1914年9月1日鍋屋上野浄水場から名古屋市民へ木曾川の水の給水が始まりました。今年が100年の節目の年にあたります。

「上流は下流を思い、下流は上流に感謝する」を合言葉に、上流と下流の人びとの交流や連携を一層深めていきましょう。

<名古屋給水100周年>

「これまでの100年、これからの100年」

齋藤まこと（みんなの会顧問、名古屋市議）



3月25日、リニューアルが進められている鍋屋上野浄水場の緩速ろ過池の通水式が行われました。乾いた砂に木曾川の水が徐々に広がっていく様子=写真=は、

水に秘められた生命力を感じさせてくれました。1914年（大正3年）に8池、1928年（昭和3年）に6池と2期に分けて建設された14のろ過池の老朽化が進んだこともあり、給水100周年を機に、47億8000万ほどかけて新たに作り直しています。その一部が完成したのでろ過池への通水式が行われたというわけです。今回の作り直しは、耐震性の確保、ろ過速度の向上、浄水効率の向上などを目的に進められ、ろ過池は14池から12池に減りますが総面積は変わりません。

この緩速ろ過というシステムは、木曾川の水の中に存在する微生物をろ過のた

めの砂に付着させ、その微生物の力を借りて水を浄化するものです。従って木曽川の水自体がきれいでないでないと成立しないシステムでもあります。ちなみに、ろ過池の上部に使用されている砂は南木曽産のものです。

名古屋市上下水道局としては構造物が次の100年耐えることができるようにと作り直しています。それは重要なことですが、木曽川の水質を保っていくこと、木曽川流域上流の森林を守り、木曽川の水質を守って緩速ろ過が継続して運転されることも次の100年を展望するためには必要不可欠なことでもあります。その

意味において、緩速ろ過池の存在は木曽川流域の上下流交流において象徴的な意味を持ちます。

6月1日には恒例の「水フェスタ」が鍋屋上野浄水場で行われ木曽広域連合や木祖村のブースもあります。6月19日～21日には、第5回緩速・生物ろ過国際会議が名古屋で開催されますし、9月上旬には水の歴史資料館のオープン、10月28日には水道給水100周年記念式典など行事がたくさんあります。みんなの会でも可能などころには参加して、「これまでの100年、これからの100年」を考えてみたいと思います。

1月25日「木曽川源流フォーラム&

第6回水源の里を守ろう 木曽川流域集会」開催

～『源流白書』の内容や意義について話し合う～

「木曽川源流フォーラム&第6回水源の里を守ろう 木曽川流域集会」を2014年1月25日午後1時から名古屋市中区の栄ガスビル会議室に約150人が参加して行いました。今回は、全国源流の郷協議会と共催で開催。2005年11月に発足した全国源流の郷協議会は、木曽川源流・木祖村や多摩川源流・小菅村、利根川源流・みなかみ町など、全国16の源流地域の自治体で構成されています。

会は、主催者を代表して斎藤まこと（みんなの会顧問）、全国源流の郷協議会会長・舩木直美氏（山梨県小菅村村長）、木祖村村長・栗屋徳也氏の3人が、上流域と下流域と一緒に集会を開催する意義や『源流白書』づくりの目的、名古屋給水100周年とこれからの源流の農山村と水を利用する都市部の上下流交流・連携についてのあいさつから始まりました。

甲村謙友氏（独立行政法人水資源機構・理事長）が、木曽川上流事務所に勤務されていた時のことや味噌川ダム完成に関する話をされました。鷺見利幸氏（株式会社スミ設備代表取締役会長）は、木祖村との上下流交流の取り組みをはじめたいきさつなどを語られました（詳細は2014年1月21日付朝日新聞参照）。続いて、中部ESD拠点協議会の石田芳弘氏（中部大学客員教授）が、今年11月に名古屋市で開催されるユネスコESD（持続可能なための開発教育）のプログラムについて説明があり、その中に川を中心にした生態系についての分科会が作られると述べられました。

伊澤眞一氏（名古屋生活クラブ代表取締役社長）は、上流の生産者と下流の消費者とのニーズのすりあわせが必要と話されました（詳しくは4、5頁参照）。そして、唐沢尚之氏（小池糶店専務取締役）は、みんなの会が作っている大豆で「みなもと」という名の味噌造りについて、上下流交流の象

徹的な取り組みであり、共生と循環の「小さな経済」としての意義を述べました。大久保秋男氏（東海地区木祖村人会会長）は、村人会を通じて川への認識や郷土愛を深まってきたことや“継続は力なり”を話されました。

基調講演は「木曾川源流の魅力とその可能性」と題して、中村文明氏（多摩川源流研究所所長、多摩川流域ネットワーク代表）＝写真左。講演は初めに、『源流白書』を作成して、源流に光を当てながら、源流域の意義を人びとに理解してもらい国を動かし、源流を守っていく仕組みづくりや法的な裏付けを確立していきたいと述べられました。続いて「藪原スキー場の雪質が良い」「水をなくしてなるものか、森をなくしてなるものか」「500年に続いている“やぶはら祭り”（7月）でのおもてなし」の話や木曾川源流の特色として中山道の宿場町である木祖村の歴史や「森林愛護、源流愛護」をモットーとする村づくり、「山には木があってこそ山」川には水が流れてこそ川（澤頭先生の教え）などが話されました。また、「源流を軽んずれば源流に泣かされる」として、多摩川源流の特色について、多摩川源流研究所の2001年4月設立の経緯や先人の息づかい聞こえる『多摩川源流絵図三部作』、本物の自然に触れることで子どもたちの瞳が輝く「源流体験教室」、源流と中流域を密接な関係として“源流は流域の宝”、企業と流域連携した森づくりなどが熱く語られ、“水は命 森は源 川は絆”“山（森）・川・海の命のつながりの復活へ”と結ばれました。



「上流・中流・下流の交流・連携をテーマにした3人のパネラーによるパネルディスカッション＝写真右＝は、斎藤まこと氏がコーディネーターとなって進められました。宮林茂幸氏（東京農業大学教授）は「昔から上流・中流・下流は密接に人、経済、文化でつながっていた。それが流域社会だったが交通網などで、その関係がズタズタにされ、切り離されていった。源流は水・命・森の原点を持っている。それを大事にしていく。上流のマイナスは下流のマイナスであって、同じ共通概念がある。源流の問題は日本全体に係わる問題として、わかりやすく示していくのが今進めている『源流白書』づくり」と述べました。

團中登志彦氏（木祖村商工観光課長）は、名古屋出張所をめぐる苦労やアンテナショップづくり、日進市の分収造林についてや名古屋市、愛知県企業庁など具体的に下流の自治体、企業、人びととの交流の取り組みを話し、みんなの会の河崎は、6年近い取り組みの現状を話し、『源流白書』で議論されている「小さな経済」「深い関係づくり」に向けた継続的な話し合いの場としてプラットフォームの必要性を述べました。

雅音人（ガネット）による清流・木曽川の流れを想起させる歌声が会場に響きわたった後、参加者全員で集会宣言を採択し集会を終えました。＊『源流白書』は5月下旬に発表されます＊

（みん・みんの会事務局）

<集会宣言>

木曽川は長野県木祖村を源流に、飛騨川など多くの支流を合わせて伊勢湾へ流れ込んでいます。また、愛知用水によって知多半島の先端、島々まで流れています。その水は長野県、岐阜県、愛知県、三重県の775万人に恩恵を及ぼしています。さらに“森は水の源、水は命の源、川は命のつながり”であり、流域で歴史的につながり、文化、経済、暮らしを作り出してきました。

今回の「木曽川源流フォーラム&第6回水源の里を守ろう 木曽川流域集会」は、源流白書の作成、名古屋市給水100周年などで改めて問われる木曽川流域の水の大切さと上下流交流の具体的展開の重要性を課題に、全国源流の郷協議会に加盟する木曽川源流域の木祖村の人びとと名古屋市をはじめとする下流域の人びとが合同で開催しました。

集会で議論されたことを通じ、上流と下流の交流・連携をさらに深めながら具体化していく方向性や課題が明らかになりました。今後の取り組みをさらにすすめるために私たちは、この集会宣言を発します。

- 一、上流と下流の情報を発信し、つなげていくことで交流・連携を一層発展させていきます。
- 一、「小さな経済圏」「密度の濃い関係づくり」についての具体策を全国源流の郷協議会が作成する源流白書に盛り込み、源流白書の意義を深めていきます。
- 一、共生と循環の新しい流域圏を創り出していきます。

2014年1月25日

木曽川源流フォーラム&第6回水源の里を守ろう 木曽川流域集会 参加者一同

水源の里の生き残り

～豊かな山やきれいな水の価値を伝える商品づくり～

（株）名古屋生活クラブ代表 伊澤眞一



源流フォーラムであいさつする伊澤さん＝2014年1月25日名古屋市で

僕は株式会社名古屋生活クラブの代表をしています。無農薬で作られた食品を中心に扱っていますが、それ以外の食品も扱っており、それなりに世間の動きも押さえているつもりです。

この仕事に関わって25年位になりますが、一番の変化は、商品に対する合格点がどんどん厳しくなっていることです。ちょっとしたことでクレームが出されます。対応しないわけにもいけないので、メーカー、

生産者に対し改善要求を出します。資本力があり、設備にお金をかけられるところしか生き残っていきません。

一次原料にしても、昔は国産が当たり前だった物がどんどん輸入原料に、製造国も中国などに移行しています。例えば商材として、味噌を考えると、大手は原料が中国産、製造も中国、なんて味噌が多いです。原産国の表示義務が無いので目につかないのです。こうやって安さを実現しているのです。

それでは地元の味噌屋さんはどうやって生き残りをはかるのか？大手味噌メーカーの設備のととのった最新鋭味噌工場に対抗して？同じように中国などに進出する？資本も無いメーカーがほとんどでしょう。

グローバリズムは、どんどん強まっています。水源の里を含む中山間地は、益々競争力を失いさびれていきます。世界中のひとがグローバリズムの誤りに気が付いて

修正していく、他の原理を追求していかない限り、この流れは続く様に思われます。

水源の里の価値はどこにあるのでしょうか。きれいな水、豊かな山、それらが経済的な価値、お金を生んでいるわけではありません。きれいな水も汚れている水も高度処理で飲める水道水になります。山の価値も木材資源の価格が下がる一方です。グローバリズムが忘れていく環境の価値、安全の価値が安すぎるのです。豊かな電気を求めて原子力発電の事故が起きました。豊かな経済を求めてグローバリズムが世界中をせっけんしています。豊かな環境を犠牲にして。

水源の里が大事なものは当たり前だけれど、経済的に大事にされていない現状を変えていくには、下流の都市の住民と上流の町村の住民が、かけがえのない山、水の価値に目覚める事につきて思う。その様なことを伝える商品が欲しい。

* ホームページを刷新しました。ご覧下さい *

HP: <http://www.kisogawaminmin1.net/>



水源の里を守ろう 木曾川流域 みん・みんの会

上流は下流を思い、
下流は上流に感謝する
を言葉に上下交流・連携を
森は水の源、水は命の源、
川は命のつながり

みん・みんの会とは



水源の里基金



木曾川流域図



大豆作り



2月25日名古屋城天守閣、27日木曽福島駅前バス待合室へ 木曽ヒノキの間伐材で木曽青峰高校インテリア科高校生6人が 製作したベンチ各4脚を贈呈！

第三期木曽川流域水源の里基金の運用として、木曽青峰高校にベンチ製作を依頼。同校インテリア科3年生6人が製作した名古屋城天守閣内の木曽ヒノキの間伐材によるベンチ4脚、木曽福島駅前バス待合室のベンチ4脚を2014年2月25日と27日に贈呈しました。

「木曽川流域水源の里基金」へのご支援、ご協力に、厚くお礼申し上げます。第4期水源の里基金の活動を進めていきます。今後ともよろしくお願ひします。

今まで贈呈した東山植物園のベンチや名古屋市科学館の木製玩具が、使用されている中で今後のフォローについて考えていかなければなりません。第四期水源の里基金を活用して、2014年度木曽青峰高校に木製玩具の補修と新しい作品の製作を依頼していきたいと考えています。

名古屋城

三つ葉葵の家紋入りベンチ

山根みちよ（みん・みんの会共同代表）

真新しいスーツに身を包んだ6人の若者が照れた笑顔で立っていた。ここは2月25日の名古屋城正門。ちょうど正午である。

今日は水源の里基金で木曽青峰高校インテリア科の学生たちが作ったベンチ贈呈式の日。製作依頼した私たちみん・みんの会からは事務局長の河崎、斎藤顧問、事務局石原と山根の4人、名古屋市からは河村たかし市長、佐藤正幸名古屋城総合事務所所長ら関係者の皆さん、そして木曽からは木曽広域連合長の宮川正光南木曽町長、三澤さん、熊澤さん、また木曽青峰高校の腰原教頭先生、古畑教諭と一堂勢ぞろいで名古屋城天守閣で顔を合わせる晴れの日となった。

若者たちは卒業式を控えて、すでに社会人

といった佇まい。昼食は引率の古畑教諭のご所望により、名古屋めしの「ひつまぶし」を堪能してきたという。

自己紹介のあと、贈呈式には少し時間があるため、一行で完成したばかりの本丸御殿に向かう。木曽ヒノキの香りが漂うなか、絢爛豪華な襖絵に目を引かれる。そして、いよいよ午後1時からの贈呈式の始まり。

河村市長の名古屋弁でのあいさつに、会場は緊張から一気にお笑いの場へと。あいさつの中での「木曽ブランドを誇りにしてほしい」との言葉にうなづく若者たち。

披露されたベンチはヒノキの間伐材で、やさしいカーブを描いており、ゆったりと座れる。レーザーで葵の焼印も入り、製作者の名



前=写真=も明記されている。

マスコミ記者の要請でベンチを囲み、さま

ざまなポーズをとる彼らの笑顔は、明るく屈託はなく将来の夢に満ちているようだ。この日のことを忘れずにやがて時が経ち再び名古屋城を訪れたとき、18歳の自分を思い出してほしい。

木曽ヒノキのベンチが、これからも彼らの誇りになるように。そして、依頼者の私たち、彼らはもちろんのこと、お城を訪れるすべての客人を百年先も癒すようにと願う。

「尾張名古屋は城でもつ」、木曽ヒノキ万歳！の心境である。

J R 木曽福島駅前バス待合室

“木のぬくもりと人のぬくもりのある町に”

木曽町の玄関口に高校生製作の木曽ヒノキ・ベンチ4脚

株式会社 21 インコーポレーション 水源水事業部
代表取締役 砂山純子

J R 木曽福島駅は木曽 11 宿の中でも特急列車が、ほぼ毎時間に一本が停車する駅です。駅に降り立つと、まず目に入るのが、駅前にある数軒の土産物店と旅館の玄関、そして、その向こうに町有林の城山の森です。

木曽町にあるミネラルウォーター製造会社の「水源水」に私が携わって 15 年余り、多くのお客様や関係者をこの駅でお迎えしていますが、その度に皆様、口を揃えて出てくる言葉が「こんなに駅の近くにまで山が迫っている駅は初めてです。本当に空気が澄んでいますね！」という感嘆の声。

「はい、ここに来ると身体の中の酸素が入れ替わって、すごく元気になれますよ！」と、私はつい木曽自慢をします。そんな“木曽大好き人間”が、ちょっと残念だったのは、駅前にあるバス待合室のベンチで、プラスチック製の味気ないものだったことです。

そのことを2年程前、みん・みんの会の事務局に話したところ、それでは木曽川流域



水源の里基金を活用して、木のベンチを木曽青峰高校に制作依頼して、寄贈しようという事になりました。

高校の快諾で、この計画が進められ、今年2月27日にベンチ贈呈式=写真=を迎えることになりました。この日、木曽青峰高校イ



旅行者に好評なベンチ＝3月29日のバス待合室
インテリア科3年生6名が製作した素晴らしいベンチは、バス待合室に置かれました。

その時初めて目にするベンチは、高校生の作品とは思えない程の出来栄で、誠に感激でした。ヒノキの間伐材を使い、木肌の風合いが生きています。機能的にもベンチの安定性を考え2脚を連結するようになっている

のです。デザインも木のぬくもりが感じられる本当に素敵なものでした。

旅行にいらした方が帰る時の最後の印象は、とても良くなるに違いないと確信します。卒業間近の忙しい中、生徒達の大変な時間と努力を思うと本当に有難く思います。また、ご指導の先生やご協力頂いた関係者の皆様に心より御礼を申し上げます。

製作にあたった6名は将来、これはお父さんが高校生のときに木曽の山で育った木で作ったベンチだよ、とぜひ子どもたちに自慢して欲しい。

“木のぬくもりと人のぬくもりのある町”木曽がこれからも人の心と身体を癒す場所であり続けるよう、私も微力ながら力を尽くしていきたいと思います。

皆様、ぜひ木曽にいらして、ぬくもりのある素晴らしいベンチに座ってみてください！

4年目の大豆作り、5月から始めます！

＜一緒に大豆作り・味噌造りをしてみませんか＞

今年の5月から大豆作りが始まります。5月10日(土)、11日(日)の大豆の苗床作り、豆まき。6月は7日(土)、8日(日)の大豆苗の定植……と木曽川源流の里・長野県木祖村で地元の人のアドバイスを受けながら大豆、トウモロコシ、とうがらしなどを作っていきます。標高1100mの180坪の畑で大豆づくり。大自然の中で楽しく、さわやかな“汗”をかきます。「楽しく作りたい(隊)」で、一緒に作りませんか！

大豆作り作業の参加希望、みんな・みんな楽作隊及び楽作隊賛助会員への参加希望は事務局、または担当者までご連絡ください。なお、作業に参加希望の方はボランティア保険(1年間390円)に加入していただきます。

みんな・みんな楽作隊は 1万5千円/年 賛助会員は5千円/年 それぞれ、味噌2kg(玉造り1kg、突き込み1kg)と大豆1kgを配分。た

だし鳥獣害や作況により少なくなることもありますのでご了解ください。

春は新緑が美しく、夏は本当に涼しい、秋は紅葉に囲まれての作業です。澄んだ夜空は月明かりの中でも天の川が堪能できます。私たちと一緒に大豆作り・味噌造りをしてみませんか。

みんな・みんな楽作隊 担当 近藤 進
(☎携帯 090-4150-6156)

<書評>『里山資本主義』(その2)

前回の「みんなの会ニュース7号」では『里山資本主義～日本経済は「安心の原理」で動く～』（藻谷浩介、NHK広島取材班著、角川 one テーマ 21 新書）の書評、感想を二人の方から寄せてもらいました。水原さんは「読んで愉快になり、心が和み、暮らしが広がる」と、また筒井さんは「時代の潮流が動き始めた」と書かれています。

「人が生きていくのに必要なのは、お金だろうか。それとも水と食料と燃料だろうか。…マネーに依存しないサブシステム(里山資本主義)を再構築しよう」と著者の藻谷氏は呼びかけています。また、藻谷氏はマネー資本主義へのアンチテーゼとして①「貨幣換算できない物々交換」の復権②規模の利益への抵抗③分業の原理への異議申し立て、の3点を述べています。

27万人が購入した『里山資本主義』の書評、感想を杉原さんに書いてもらいました。

外的条件が激変しようと、農業で生きていく

豊富な木材資源で脱化石燃料・脱原発に進むオーストリアの事例に勇気

杉原 航 (名古屋生活クラブ)

私のふるさと、中国山地が舞台の本です。

中国山地の主峰、伯耆大山(ほうきだいせん)から延びる尾根の末端が私の里山でした。なだらかな尾根と浅い谷が無数にきざまれ、そのやさしい地形を利用して山林と梨畑、棚田がモザイク状に展開し、谷筋には灌漑用のため池がいくつも作られました。

里山では砂鉄を使った「たたら製鉄」の精錬くずや土器のかけらが簡単に拾えました。近くには木地師の村もありました。子どものころの私にとって里山は、楽しみに事欠かない場所であるとともに、村の歴史そのものでした。

人びとは里山とともに生き、里山に生かされてきました。例えば沖浦和光は、悲惨をきわめた幕末の飢饉で、中国地方で例外的に餓死者が少なかったのは山のおかげだといいます。食うに困った人々は山に逃げたからです。比較的温暖で標高が低い中国山地は、飢饉で困窮した貧農たちをやさしく抱きしめてくれました。

その里山が、私が故郷を離れてわずか2、30年で一変しました。

農業の後継者不足は私の村でも同じです。特産の梨の木はつぎつぎ伐られ、圃場整備で広がった棚田は国の減反政策もあって多くが休耕田と化しました。高齢化した農家は改良区の賦課金支払いに苦しんでいます。故郷の里山を思うと胸が痛みます。その思いは言葉で表現できません。

本書は、マネー資本主義が席卷するグローバル経済のサブシステムとして農山村を位置ける試みです。脱原発にかじを切り、豊富な木材資源を活用することで化石燃料への依存度を大幅に減らしてきたオーストリアの事例は勇気を与えてくれます。同様に、木材をはじめ見向きもされない資源の徹底活用を推進してきた中国地方のさまざまな先進事例も、私たちの蒙を啓くのに十分なインパクトがあります。

しかし率直に言えば、これが本当に荒れ果てた農山村を再生する解なのか、私は疑問に思います(都会の人には受けがよいかもしれないけれど)。一方で、「ならばもっと現実的で効果的な処方箋を出せ」と問われれば、返答に窮するほかありません。

思い切って視野をもっと長く取ってみます。縄文人は豊かな森の恵みにすがって生きていました。紀元前 10 世紀、朝鮮半島から日本列島に水田稲作が伝わりました。そして私の祖先は地を這って田の草をとり、里山を開墾し、少しずつ田畑を広げていきました。気が遠くなるほど長い長い営みです。すると少しだけ希望がわいてきます。

あきらめることはない。なんであれ、好きなことをやればよい。外的条件がどれほど激変しようとなりわいとしての農業で飯を食って生きていけさえすればよい。『里山資本主義』は、そのためのテキストだと理解しました。

<編集後記>

昨年 3 月、木曾青峰高校インテリア科 9 人の高校生が木製玩具を贈呈した。それらは同館 2 階にある「おもちゃひろば」に置かれている。



その現場を見たいと思って、3月25日に名古屋市科学館に出かけた。春休み期間ということもあって、子どもたちがいっぱい。贈ったおも

ちゃは親子で楽しんでもらっている=写真。何ともうれしい光景だ。

3月29日は、木曾に出かけた。その目的の一つは、2月27日に贈呈したバス待合室のベンチの様子が気になったのこと。「皆さんに喜ばれています」と聞いた。3年前の2月下旬、名古屋市の東山植物園へ木曾青峰高校の高校生が製作したベンチを贈った。その製作した高校生のお母さんに偶然お会いした。「自分が作ったベンチに来園した人が座ってもらえる、と子どもがとっても喜んでいました。今は高山で働いていますが、当時の掲載された新聞を今も大事に持っています。…」

木曾川流域水源の里基金を使って取り組んできたことが、いろいろなつながりを生み出していることを実感した。(事務局 河崎)

*本年度(2013年6月から14年5月)会費の納入をお願いします。下記の郵便振込口座をお願いします。

8月下旬に総会と上下流交流集会を考えています

☆☆☆☆第4期木曾川流域

水源の里基金へ募金の

ご協力をお願いします☆☆☆

<郵便振込口座>

口座番号; 00810-1-158556

加入者名; みんなの会

(水源の里基金と記してください)

水源の里を守ろう

木曾川流域みんなの会

☆共同代表☆

山根みちよ(前日進市議)、

伊澤真一(名古屋生活クラブ)

☆顧問: 斎藤まこと(名古屋市議) ☆

☆連絡先☆

〒464-0075

名古屋市千種区内山3-7-11 斎藤事務所気付

TEL 052(745)1001 FAX 052(741)2588

HP: <http://www.kisogawaminmin1.net/>

e-mail: suigenosato@gmail.com